

やっぱり、家族っていいね。



家族の日 家族の週間

応募期間

[写真部門] 平成27年7月1日(水)～9月18日(金)

[手紙・メール部門] 平成27年7月1日(水)～9月30日(水)

※郵送の場合は、当日の消印有効

応募点数

「写真」「手紙・メール」それぞれ一人1点まで

表彰

最優秀作品は、平成27年11月15日(日)開催予定の「家族の日」フォーラム(山口県山口市)において表彰する予定です。

作品集

入賞作品は作品集にまとめ、入賞者及び関係方面に配布します。また、内閣府ホームページ「家族の日・家族の週間」に掲載します。

その他

1. 審査の結果は、入賞者のみ本人あてに通知します。
2. 応募作品の一切の権利は、内閣府に帰属します。
3. 応募作品は一切返却しません。
4. 応募は未発表作品に限ります。
5. 応募者の個人情報の取扱いについては、「家族の日」「家族の週間」の展開に必要な範囲で利用します。応募者の同意を得ずに、利用目的を超えて利用したり、第三者に開示することはありません。
6. 電子メールによる応募の際、添付ファイルがウイルスに汚染されていると作品が事務局に届きませんので、予めご了承ください。
7. 入賞者の作品に明記した情報は、「家族の日」「家族の週間」等を展開する中で、必要に応じ、利用、提供します。また、入賞作品は、内閣府ホームページ、「家族の日」フォーラム等で展示します。

応募先

【郵送の場合】

〒107-0062 東京都港区南青山5-4-19 ジ・アッパーレジデンシィーズ・ミナミアオヤマ 2F
(株)アランチ東京内 「家族や地域の大切さに関する作品募集事務局」

【電子メールの場合】

kazokunohi27@avalanche.co.jp

【PCサイトの場合】

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/family/index.html>
(内閣府ホームページ「家族の日 家族の週間」)



主催

内閣府

お問合せ

家族や地域の大切さに関する作品募集事務局

 **0120-332-029** (平日10時～18時)
(フリーダイヤル)

内閣府では、子どもと子育てを応援する社会の実現に向けて、子育て家族やその家族を支える地域の大切さについて理解を深めてもらうために、平成19年度から11月第3日曜日を「家族の日」、その前後各1週間を「家族の週間」と定め、この期間を中心として理解促進を図っています。

[平成27年度]

家族や地域の 大切さに関する 作品コンクール

作品募集中!

写真部門

7/1(水) ▶ 9/18(金)

手紙・メール部門

7/1(水) ▶ 9/30(水)



やっぱり、家族っていいね。



[11月の第3日曜日]

11月15日(日)は「家族の日」

[家族の日の前後各1週間]

11月8日(日)～21日(土)は「家族の週間」

「家族」で「地域」で見守る「子育て」。

あなたのあたたかい気持ちを作品にしてご応募ください。

家族や地域の結びつきの大切さが、改めて見直されている今だからこそ、子育て家族のきずなとそれを支える地域全体での子育て支援の大切さを見つめてみませんか。

あなたからの写真を、手紙・メールを、そこに込められたあなたの思いをお待ちしております。

写真部門

テーマ1 子育て家族の力 (子育て家族の絆、子供と深める家族の絆)

(例) 家族団らん、親子で一緒に何かに取り組んでいる、パパの育児、3世代同居家族の様子など、子育て家族の絆の力強さ、あたたかさを表しているもの



審査員
カメラマン
渡部陽一氏 ほか

テーマ2 子育てを応援する地域の力 (地域ぐるみで子育て支援)

(例) 地域での子育てイベント(お祭り、親子教室、子育てひろば、子供と他世代との交流、WLBの取組など)等、地域ぐるみでの子育て支援の様子など、社会全体が子育てを応援しているという姿を表しているもの

応募資格

小学生以上の者(プロカメラマンは除く)

応募要領

作品には、以下の事項を明記の上、郵送、電子メール、またはPCサイト(内閣府ホームページ)にてご応募ください。

- ①応募テーマ、②作品タイトル、③簡単な解説(エピソード)(100字程度)、④郵便番号、住所、電話番号、⑤氏名(ふりがな)、⑥性別、⑦児童・生徒は学校名・学年、一般は年齢・職業

※作品は未発表・オリジナルのものに限ります。

※2人以上を撮影した写真でご応募ください。

※応募は一人1点で、デジタルカメラ、フィルムカメラまたは携帯カメラで撮影した、カラーまたは白黒プリント、もしくはデータでの応募とします。携帯電話での画像添付による電子メールでの応募も可能です。

賞

募集テーマごとに、最優秀賞1点、優秀賞5点以内。表彰状と副賞。いずれも内閣府特命担当大臣(少子化対策)表彰。

手紙・メール部門

テーマ 子育てを家族みんなで支え合うことの大切さ、感謝などの思いを伝えるもの、又は、子育てを社会も応援していくことの大切さを訴える内容のもの

(例) 夫から妻へ、妻から夫へ、親から子供へ、子供から祖父母へ、子供から単身赴任中の親へ、社長・上司から子育て社員へ など

応募区分

- 1.小学生の部 2.中・高校生の部 3.一般の部

応募要領

作品は、200~400文字程度で、以下の事項を明記の上、郵送、電子メール、またはPCサイト(内閣府ホームページ)にてご応募ください。

- ①応募区分、②作品タイトル、③郵便番号、住所、電話番号、④氏名(ふりがな)、⑤性別、⑥児童・生徒は学校名・学年、一般は年齢・職業

※作品は未発表・オリジナルのものに限ります。

※携帯電話による電子メールでの応募も可能です。

賞

応募区分ごとに、最優秀賞1点、優秀賞5点以内。表彰状と副賞。いずれも内閣府特命担当大臣(少子化対策)表彰



「家族の日」「家族の週間」について

内閣府では、平成19年度から11月第3日曜日を「家族の日」及びその後各1週間を「家族の週間」と定め、この期間を中心として家族や地域の大切さ等について理解促進を図っています。

この「家族の日」「家族の週間」の事業の一環として、家族や地域の大切さに関する「写真」及び「手紙・メール」を公募し、優秀な作品を表彰しています。

平成26年度 最優秀賞受賞作品

写真、手紙・メール両部門ともに、その他の入賞作品は内閣府ホームページ「家族の日」「家族の週間」をご覧ください。 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/family/index.html>

テーマ1 「君の笑顔」

東京都 男性 31歳



作品のエピソード

仕事が忙しく、平日はめったに一緒に時間を過ごせない息子。それでもたまに早く帰宅すると満面の笑顔で玄関まで走って来てくれる息子。全く十分ではないけれど、少なくとも週末の48時間は全て息子のために使いたい。君の笑顔が見たいから。

テーマ2 「元気いっぱい大きくなーれ」

高知県 女性 41歳



作品のエピソード

私たち家族の住む、高知県の町では、子どもたちの健康と成長を願い、町特産の紙で作ったこいのぼりを地元の清流仁淀川で泳がせるイベントが毎年ゴールデンウィークの恒例行事となっています。この写真は、そんなこいのぼりを見に行ったときに、撮ったお気に入りの一枚。二女を家族みんな(主人、長女、三女、従兄)でこいのぼりのポーズにしている様子です。みんな元気に大きくなってね。

小学生の部 「お父さんの仕事」

静岡県 男性 小学3年生

ぼくのお父さんは、トラックに乗って、カンやペットボトル、ダンボールを集める仕事をしています。夏休みに、一日だけお父さんといっしょにトラックに乗って、仕事を見に行きました。お父さんは、朝6時ごろ家を出て、7時10分ごろぼくと妹をせて、しずおか市に行きました。そして、お父さんが車からおりていって言った場所で、いっしょにカンとペットボトルを運ぶ手伝いをしました。それは、全部で30分くらいありました。とてもおもしろかったです。全部で10か所ぐらいの場所によると言っていました。だけど、せまい道の所やお店の人に邪魔になる所は、トラックの中にいたので全部は手伝わなかったけど、半分くらい手伝えました。帰ると中、妹とぼくは、トラックの中でつかれてねてしまいました。その後、家によってぼくと妹をおろして、お父さんは会社にもどりました。会社について後、お父さんは集めてきたペットボトル、カン、ダンボール、紙などを、リサイクルするために会社におろした、と言っていました。お父さんの話では、集めたペットボトルはこ

なにして、大きなふくらむにつめてさいりょうすの場所にもっていくみたいです。カンは、アルミカンとスチールカンに分けて、つぶしてかためます。そして、それぞれのさいりょうすの場所に運びます。後で図書館に行って、しげんゴミのリサイクルの本をかりて読みました。おとうさんが子どものころは、もやしてしまおうか、地面にうめてしまおうかた方しれないと、本に書いてありました。お父さんの仕事を見て、リサイクルのことが少し分かりました。お父さんの会社と、本に書いてあったリサイクルのやり方は、少しちがうみたいだけど、物をむだにしないということは、同じことだよと、お父さんが教えてくれました。あと、お父さんの会社ではペットボトルのキャップを、集めていて、それをお金にかえて、ちゅうしゃのワクチンを買って、ちゅうしゃをうでないせいかいの子どもたちに、送るそうです。だからぼくは、ペットボトルのジュースをのんだ時は、キャップを集めて学校にもって行きます。これからも、きょう力していきます。

中・高校生の部 「優しい母」

愛知県 女性 高校3年生

「倒れていて、かわいそうだったから」そう言いながら、すでに息絶えた小鳥を両手に包んで母に差し出した私、当時4歳。「かわい子、連れて来た」公園に無造作に置かれた段ボール箱の中から抱き上げた子猫を、自転車の前カゴに入れて帰宅した私、当時6歳。きっと母は、毎日ハラハラしていたに違いない。「あっちゃん、本当に優しいわ」そう言いながら頭を撫でてくれる母の優しい笑顔が見たくて、動物との縁を度々つなぐパイプラインになっていた私。本当の気持ちに全く気付く事ができなくて、ごめんなさい。「母さん、実は動物が苦手みたいだよ」高校生になった私に、父が告げた衝撃の事実。毎日、私と私の連れて来た動物のために、努力と我慢をしてくれていたはずなのに、そんな素振りも全く見せなかった母の強さと優しさを想ったら、いてもたってもいられなくなり、母にその事を尋ねた私。すると、母は一瞬だけキョトンとした表情を浮かべた後、「動物との縁結び名人のあんたと暮らしていたら、知らないうちに、動物嫌いも治ったよ。私を成長させてくれて、ありがとう」と言い放ち、大きな口を開けてガハハッと勢い良く笑った。母の心の広さに完敗した私の姿が、そこにあったのでした。

一般の部 「君の寝息」

岐阜県 女性 30歳

また、叱ってしまった…。君の寝顔を見ながら、いつもの後悔。そんな時、私は一枚の写真を見る。保育器の中で、沢山の管に繋がれた、生まれたばかりの君の写真。1800グラム程で生まれ、しばらく集中治療室で入院していた。呼吸が不安定で、酸素注入なしでは生きられない命だった。先に退院した私は、君と離ればなれ。それでも、胸が張ってきて、お乳を絞らずにはいられない。もしかして今、保育器の中で、お腹がすいて泣いているのかな。そう思うと、お乳と一緒に涙がポタポタとこぼれた。かつて、呼吸すら危うかった君は、今、私の隣で、寝息をたてている。それも、結構な寝息だ。それだけでいいのだ。そのことに感謝して、私はまた「お母さん」を頑張ろう。